鹿児島カトリック教区報

〒892-0841
鹿児島市照国町13-42
カトリック鹿児島司教区
電話099（226）5100
振込口座 02030-2-8359
編集発行　教区広報部
1部60円年間〒共1100円

道標

世界宣教の日に寄せて

―異邦人への宣教者聖パウロに学ぶ―

鹿児島教区司教　中野裕明

教区の皆さま、お元気でしょうか。

今回は「世界宣教の日」（10月19日）に、異邦人への宣教師である聖パウロに学びたいと思います。

ご存じのようにパウロは、生粋のユダヤ人でありながら、復活したイエスとの劇的な出会いにより、主イエスの使徒（イエスから遣わされた人）となりました。彼は生前、イエス自身が召し出し、使徒と任命したペトロを頭とする12使徒とは趣を異にします。パウロはユダヤ教の教師でしたが、聖霊降臨後増えていくイエスの道を歩む人（キリスト信者）たちを迫害していました。しかしその矢先に復活したイエスと出会い、キリスト教に改宗した人です。（使徒言行録9・1～19参照）

受洗後、パウロは熱心にキリスト教を広めましたが、キリスト信者からは迫害者、ユダヤ教徒からは裏切り者との悪評が立ち、結局ユダヤ人以外の民族、すなわち異邦人を対象にした宣教活動を始めました。ペトロを頭とする使徒たちと和解して行動をともにしたのは、14年後だったようです。（ガラテヤ書2・1参照）

今回はアブラハムの子孫で、「選民」とされていたユダヤ民族の歴史にルーツを持たない、異邦人への宣教に当たったパウロの話の4つのポイントを取り上げてみたいと思います。

なぜなら、われわれ日本人はユダヤの歴史にルーツを持たない民族の一つ、つまり異邦人だからです。

①パウロは、創世記に描かれている人祖アダムの罪に注目します。つまり、人祖の罪とは「神の意思への不従順である」と指摘します。その前に人類の罪として、次のような論理を展開します。

「不義によって真理の働きを妨げる人間のあらゆる不信心と不義に対して、神は怒りを現されます。（中略）世界が造られたときから、目に見えない神の性質、つまり神の永遠の力と神性は被造物に現れており、これを通して神を知ることができます。従って、彼らには弁解の余地がありません。なぜなら、神を知りながら、神としてあがめることも感謝することもせず、かえって、むなしい思いにふけり、心が鈍く暗くなったからです。」（ローマ書1・18～21参照）

この人類の罪を消すために「イエスは神の意思への従順」を実行することによって、人類は神と和解し、幸福を享受するという論考になります。

②接ぎ木のたとえ。パウロは接ぎ木の例を用いて、次のように言います。

「ある枝が折り取られ、野生のオリーブであるあなたが、その代わりに接ぎ木され、根から豊かな養分を受けるようになったからといって、折り取られた枝に対して、誇ってはなりません。誇ったところで、あなたが根を支えているのではなく、根があなたを支えているのです」（ローマ書11・17～18）

このたとえは、イエスが話した「ぶどうの木のたとえ話」（ヨハネ福音・1～17参照）の主旨と同じですが、折られた枝は異邦人だけではなく、キリストを受け入れていないユダヤ人のことを指していると思われます。私たち日本人は、完全にキリストという幹に接ぎ木されたものであり、その幹から霊的養分を、ご聖体を通していただいていると言えます。

③パウロは言います。「あなたがたは皆、信仰により、キリスト・イエスに結ばれて神の子なのです。洗礼を受けて、キリストに結ばれたあなたがたは皆、キリストを着ているからです。そこではもはや、ユダヤ人もギリシャ人もなく、奴隷も自由な身分の者もなく、男も女もありません。あなたがたは皆、キリスト・イエスにおいて一つだからです。」（ガラテヤ書3・26～28）

このパウロの言葉は、現代社会の大きな課題である移民問題の解決の糸口になると思います。現在、日本教会は、多国籍・多文化信者の教会となっています。キリストに結ばれた信者がキリストを着る者とは、中身は違えどもみながキリストという唯一のユニホームを着けている、ということではないでしょうか。

自分たちの文化や価値観は保ちながら、キリストがめざす「神の国」の建設という共通の目的を持ちたいものです。

④最後に、宣教の必要性についてパウロの主張を聞きましょう。

「信じたことのない方を、どうして呼び求められよう。聞いたことのない方を、どうして信じられよう。また、宣べ伝える人がなければ、どうして聞くことができよう。遣わされないで、どうして宣べ伝えることができよう。」（ローマ書10・14～15）

それまでサウロだった彼は、洗礼を受けてから、パウロと呼ばれるようになりました（使徒言行録13・9参照）。私たちも受洗した時各自洗礼名を頂きました。新生した私たちは、パウロに倣い、福音宣教に邁進したいものです。

鹿児島教区評議会

10月13日（月）10時～15時

テーマ：教区財政の自立を目指して（逼迫する教区財政の現状を分かち合い、正常化への方策を探る）。

場　所：ザビエル教会（終了後15時20分頃からミサ。参列は任意）

出　席：主任司祭、助任司祭、助祭、信徒代表男女１人ずつ（うち１人は小教区経済問題評議員。男女で出すのが難しい場合は男性のみ、女性のみ、又は１人のみでも可）、修道女連盟代表。

旅　費：プール制（受付に領収証を提出し交通費・宿泊費を申請する。後日、各小教区の負担が均等になるように教区会計部から連絡）

※昼食・飲み物等を持参のこと。

教区評議会を前に意見交換

9月2日開催のコンベンツス

9月2日（火）午前10時から教区本部を主会場に教区で働く聖職者の集い（コンベンツス）があった。

この日、教区本部に集まったのは21人の聖職者たち。その中には四條淳也終身助祭（喜界島担当・神奈川県在住）の久しぶりの姿もあった。

会議では主に逼迫する教区財政建て直しのための方策案の一つ「司祭生活費支援基金」について司祭たちの意見を聴くことが主だった。この基金導入について中野司教は、ここ数年の教区財政の状態を説明した。中野司教によると教区財政はこれまで篤志家からの寄付などで持ちこたえてきたが、ここ10年余でそれらの寄付が主であった特定預金を取り崩して教区を運営させてきたこと、その特定預金もついに枯渇してしまったとのことであった。

そのうえで、支出の多くを人件費が占めていることに触れ、すでに横浜教区が取り入れている司祭の生活費援助に直結する信徒からの献金制度（司祭生活費支援金）を創設してはどうかというものだった。

会議では、司祭たちから小教区における信徒の生活状態や教会維持費納入状態の意見交換があり、教区評議会では新しい制度の導入の賛否を諮ることに限定せず、教区財政の現状を分かち合い、正常化への道を探ることとなった。

桃薗終身助祭を追悼

9月2日（火）午後2時から鹿児島カテドラル・ザビエル教会では、8月5日に帰天した教区の終身助祭・ペトロ桃薗淳一郎師の追悼ミサがささげられた。

ミサにはコンベンツスを終えた聖職者21人と静養中の寝占敦之神父の姿があった。参列した信者たちは40人ほどであった。

四條淳也終身助祭のヨハネ福音書朗読後の説教で中野司教は、初代教会に遡って助祭の役割について「教会の豊かさを表現する務めをもつ者」と説明した。そのうえで司教がまだ4歳だった頃の桃薗青年との触れ合いなど紹介し、教区昇格にも立ち会った桃薗助祭を「時の証人」と表現し、「時の証人は消えたが、彼の働きは記憶に残っていく。彼のように要理をしっかり学び、ブレない信仰を持ち続けていこう」とメッセージを送った。

ミサの終わりには、追悼の祈りがささげられたほか、司祭団が高らかに歌う閉祭の歌「サルヴェ・レジナ」でその魂の永遠の安息を願った。

「青年の祝祭」での感動

鹿児島教区からの参加者感想

聖年の扉に触れて感じたこと

ザビエル教会　平尾菜夏実

今回ローマ聖年巡礼に参加するにあたり、私は一つの目的をもって臨みました。それは「イエスが私にどのように働きかけてくださったのか」を見つめ直すことです。

ここでは巡礼中、私が思い巡らしていた信仰について体験談と共にお話ししたいと思います。

私は２０２４年に開催されたＷＹＤリスボンにも参加し、その大会中、前教皇フランシスコはすべての若者に問いかけられました。

「真実とは何か。本当の幸せとは何か。人生の意味とは何か」。

私は今回の巡礼に臨むにあたり、その言葉を思い起こしました。

ローマの四つの巡礼指定教会を巡り、それぞれの教会の聖年の扉に触れることができました。その扉に触れようと手を伸ばす大勢の巡礼者が列をなし、順番を待ちわびている姿を目にしながら、私は聖書の中でイエスの衣に触れようとした人々の場面を思い浮かべました。そうした雰囲気の中で、自然とイエスが私にどのように働きかけてくださっているのかを思い巡らすことができたのです。

また、祝祭の中でゆるしの秘跡を受ける機会がありました。免償を受け、赦しを授かったことにより、「キリストこそ希望であり、その希望は欺かない」ということを心から実感できる時間になったと思います。

さらに、祝祭の終盤には教皇レオ14世による晩の祈りとミサが行われました。幸いなことに、私たち日本巡礼団の一部は、聖年の十字架を手に祭壇へと歩まれる教皇様の姿を間近で見ることができました。

その瞬間、私は感動のあまり、思わず涙を流してしまいました。私はただ教皇様を見ているのではなく、まるでイエスの愛と恵みが重なり、私たちに近づいてきてくださるように感じたのです。

ミサの中で教皇様は、「人生は選択の積み重ねである」と語られました。

私たちはまず自ら選ぶのではなく、無償の愛によってすでに選ばれている存在であること。恵みによって生かされていること。そして「選ぶ」という行為は努力であると同時に、愛によって行われるものであること。―この説教の内容は私の心に深く響きました。

この話を受けて、私が今回の巡礼に参加するという選択をしたのも、これまでの選択の積み重ねの結果であったと気づきました。

人は「自分はいったい何のために生きているのか」と人生の節目ごとに自問します。

私自身、高校生になったとき、大学生になったとき、社会人になったとき、その都度環境の変化に伴い、新たな選択を迫られました。人生とはまさに、そうした選択の連続なのだと思います。

四つの聖年の扉に触れ、各地の教会を巡り、仲間たちと日々を共にし、分かち合い、そして教皇様のお話を受ける中で、私は今回の巡礼を通して「生涯、創造者でありたい」と考えるようになりました。

ここで言う「創造者」は、まず自分の生き方を創り出す者です。仕事、人間関係、社会活動…それらを含めた人生そのものを主体的に形づくる存在でありたい、そして何よりも、誰かにとって意味を与える人でありたいと願うようになりました。

これまで私は多くの人に助けられ、支えられて生きてきました。これからはその恵みにこたえる形で、誰かにとって意味のある生き方をし、信仰を伝え、広げていきたい、それもまた「創造する」ということの一部であると感じています。

この巡礼を通して、イエスは私に「創造者となること」を語りかけてくださいました。日本に戻った後も、この歩みを止めることなく、福音の光に照らされながら、信仰を日々の生活の中で証ししていきたいと願っています。

十字架を掲げる教皇様

祈りで味わった一体感

古田町教会（県外在住）　岩元みら

この度、２０２５年聖年「青年の祝祭」公式巡礼団に参加するお恵みをいただき、心から感謝いたします。また、祈りと多額の支援で送り出してくださった鹿児島教区の皆さま、ともに旅路を歩んだ仲間たち、そして現地で導いてくださった神父様やガイドの方々にも深く感謝申し上げます。

今回初めてローマを訪れ、脈々と受け継がれてきた信仰の源に触れることもでき、ＷＹＤのような大規模な国際的イベントにも初参加できた事は、私にとってかけがえのない体験となりました。

特に心に残っていることが二つあります。

一つ目はラテラノ大聖堂へ入場する前にアンドレア・レンボ司教様の計らいでシチリアのグループと一緒に祈りと歌をささげたことです。

ラテラノ大聖堂は四つの教皇バシリカの一つで、ローマの司教座聖堂にあたります。ここで、イタリア語と日本語で交互に「主の祈り」「アヴェ・マリアの祈り」、さらに聖年の公式聖歌である「希望の巡礼者」をともに歌いました。

今回の巡礼では、世界中の人々と祈りをともにする機会がいくつもありましたが、それまではあまりに人が多く、見える景色も非日常的で、どこか夢のようで自分の心に染み込んでこない感覚がありました。けれども、このラテラノ大聖堂での出来事では、言語の違いを越えて同じ祈りと歌をともにする繋がりと喜びを、特に実感することができました。

二つ目は「青年の祝祭」で行われた晩の祈りです。

会場であるトル・ヴェルガタには大きな特設ステージが設置され、私は８月２日に開催された晩の祈りにステージ近くであずかることができました。

始まる前には、教皇レオ14世がステージの祭壇へ向かわれる道中で、間近にそのお姿を拝見する恵みにあずかりました。

大きな感動に包まれる中、晩の祈りは始まりました。当初は周囲からざわめきも聞こえてきましたが、後半の聖体賛美式のころには会場全体が静寂に包まれ、１００万の人が一つの心で祈っていることを感じました。

私自身も祈りの中で、今回の巡礼で出会った仲間、司祭、いつも支えてくれる家族や親戚、教会で出会った方々、そしてキリスト教とのつながりを見出した先祖のことを思い起こしました。すべての人・出来事への感謝と、この時間の尊さを実感したとき、涙が自然に溢れて止まりませんでした。

この巡礼を通して、世界中に多くの若いカトリック信者が存在し、祈りを通して一つに結ばれていることの喜びを心から感じました。そして今、自分がイエス・キリストを信じる恵みにあずかっていることへの感謝を、これまで以上に深く覚えるようになりました。

この貴重な体験は、私のこれからの信仰生活を照らし、支えてくれる大きな糧となることでしょう。

改めて、この巡礼に参加する恵みを与えてくださった神様に感謝しつつ、これからも信仰の歩みを続けてまいります。

サンピエトロ広場で教区からの参加者

短信

▼司教座教会献堂記念ミサ

献堂記念日に当たる９月15日（月）、鹿児島カテドラル・ザビエル教会では午前９時から献堂記念のミサがささげられた。この日は、奄美大島での宣教再開記念ミサをささげるために中野司教不在となったため、司教総代理の泉浩二神父と主任司祭の小隈憲士神父がミサを司式した。参列した信徒は約40人だった。

ヨハネ福音書朗読後に説教したのは小隈神父。神父は司教座があるカテドラルが教区の母なる教会であり神の民の一致を表すとし、献堂の日にここに集うことは大切なこととした。またこの日が、悲しみの聖母マリアの記念日であることから、キリストの生き方と一致したマリアの謙遜さを称え、「希望は愛から生まれる。聖年も残すところ３か月、私たちの生命はこの地上で終わるものではないことを思い起こし、残りの聖年を過ごそう」とメッセージを送った。

2025年通常聖年
「青年の祝祭」ローマ巡礼報告

教区本部　霧島　彬

今回の通常聖年にあたって日本カトリック司教議会青少年司牧部門が主催した青年のためのローマ巡礼に、鹿児島司教区からは平尾菜夏実さん（ザビエル教会）、岩元みらさん（古田町マリア教会）、そしてわたし霧島神父が参加しました。

鹿児島司教区の皆様には祈りと寛大な献金によって参加者を支えていただいたことに心より感謝申しあげます。

聖年期間中はローマで様々なカテゴリーの人々のためにほぼ毎週聖年巡礼行事が企画されており、「青年の祝祭」もその一つです。

今回の日本の公式巡礼は7月27日（日）～8月5日（火）の旅程で青少年司牧部門担当のアンドレア・レンボ東京大司教区補佐司教様を団長に、司教2人、司祭7人、事務局2人、全国からの青年41人の合計52人で構成されました。

巡礼団は7月27日（日）夜に羽田空港を出発し、乗り継ぎを経て28日（月）の朝にローマに到着し、日本巡礼団の滞在場所であるローマ市郊外の社会福祉施設に移動しました。なお宿泊は仮設置されたテントでした。

翌29日から31日は主として巡礼団全体でのローマ四大バシリカの聖なる門の巡礼とその他のローマ市内の巡礼・観光にあてられました。

29日（火）は午前中に場外の聖パウロ大聖堂訪問、午後は聖ペトロ広場での福音宣教省リノ・フィジケッラ大司教司式による歓迎ミサ（なおミサ直後にはサプライズでレオ14世教皇様もあいさつのために登場しました！）。

30日（水）は午前中にサンタ・マリア・マッジョーレ大聖堂（教皇フランシスコもここに埋葬されている）を訪問したのち、午後にラテラノ大聖堂を訪問し、あとは班行動。そして31日（木）は午前中に聖ペトロ大聖堂を訪問し、午後は班行動。

毎日ワールド・ユース・デイなみに巡礼者であふれる中を、世界中からの青年たちと自由に交流しつつ、祈りのうちに巡礼を果たし、聖年の恵みと全免償のたまものを願いました。

8月1日（金）は公式にはチルコ・マッシモ遺跡でのゆるしの秘跡にあてられていましたが、日本巡礼団は午前中に神言会本部にて（日本語での）ゆるしの秘跡と霊的指導の時間をもちました。

2日（土）はバスと徒歩でローマ郊外のトル・ヴェルガタ地区へ移動し、翌日の巡礼の締めくくりにあたる教皇ミサの会場に入りました。夜には教皇様司式の聖体礼拝を含む晩の祈りがあり、そこで皆、野宿で夜を明かしました。

翌3日（日）の教皇ミサは約100万人が参加していたとのことです。言語の違いもあり、その場では教皇様の説教の意味もほとんど分からなかったとしても、そこで行われているのは普段あずかっているのとまったく同じミサ。同時に、ローマという私たちの信仰のいわば中心地で、私たちの信仰の地上におけるかなめであるレオ14世教皇様のすぐそばで、あらゆる国々からの青年とともにあずかるミサ。多くの青年にとって、自身の信仰の恵みの大きさに驚き、感謝し、喜び、そして自信を持つきっかけとなったに違いありません。

わたし個人としても5年ぶりのローマであり、初めてレオ教皇様を見ることができたのは大きな喜びでした。しかしそれ以上に、真剣に主イエスとのかかわりを求める青年に出会い、司祭として彼らに同伴・奉仕することができ、自分の受けた叙階の恵みに改めて感謝する1週間となりました。

最後に教皇様が8月3日のミサ説教で述べられた言葉を引用します。青年だけでなく若い心を持つすべての信者に向けられた言葉でもあると思います。

「イエスとの友愛にとどまろうではありませんか。祈りと、礼拝と、聖体拝領と、しばしばゆるしの秘跡を受けることと、惜しみない愛によって、この友愛を深めようではありませんか。…どこにいても、偉大なことを、聖性を目指してください。」

日本からの巡礼団（神言会本部前で）

イグナチオの霊躁㉘

紫原教会主任司祭　貴島丈弥

涙の恵み

「30日の霊躁に入りさえすれば、大きな恵みがもらえるであろう」という甘い考えを持っていたので、霊躁に向けて大した準備も心構えも持たずに始めてしまいました。そういう軽い気持ちであったので、第一週の黙想は、なかなか深く入り込むことができずに、集中できないまま罪の黙想を表面的に続けていました。

「自分には罪なんかない」、「あったとしても軽いものだ」というように自分自身を「聖人化」して見ていたので、罪と向き合うことや探し出すことができないまま過ごしていました。しかし、同伴シスターの「ねちっこい」、「しつこい」追い込みもあり、自分の罪を見つけ、その重さと向き合うことができました。

できる限り過去にさかのぼり、探し出せる限りの罪を見つけ出し、向き合いました。そして、自分の罪というものがどれほど重く、それらを犯した自分が、どれだけ醜いけがれた存在であるのかということを知りました。

それを知った後の黙想で、わたしは御父に尋ねました。

「わたしはこんなにも醜くけがれたものです。それでもまだあなたはわたしを息子と呼んでくれますか」。

すると、すぐに「もちろんだ、わたしの息子よ。わたしのもとに来なさい」という返事がかえってきました。そのあと、涙があふれ出て止まらなくなりました。黙想時間のあともずっと止まりませんでした。それは初めての経験で、初めて神さまの無償の愛に触れた瞬間でした。そしてやっと「なまごろし」のような長い第一週を終えることができましたが、まだまだ本当に深いところには入れていなかったようです。

調理スタッフ募集

いつもご支援ありがとうございます。調理スタッフを募集しています。ご連絡をお待ちしています。

とそこども食堂・貴島神父
℡080（9823）5027

会と催し　10月

1日（水）中野アカデミー・教区本部・13時30分
4日（土）サンタマリア神父叙階記念（1970年）
▼朴昶奎神父霊名（アシジの聖フランシスコ）
5日（日）年間第27主日
▼アッシャー神父命日（2021年）
▼デクルス神父命日（1980年）
7日（火）みことばを祈る集い・ザビエル教会・10時
8日（水）大松正弘神父命日（2018年）
10日（金）福崎英雄神父叙階記念（1989年）
11日（土）青年会・教区本部・18時
12日（日）年間第28主日
13日（月）教区評議会・鹿児島カテドラル・10時
15日（水）長崎教会管区会議・大分・～16日
18日（土）聖ルカ福音記者
▼池上利男助祭霊名（聖ルカ）
19日（日）年間第29主日
▼世界宣教の日（献金）

「世界宣教の日」は教皇庁信仰弘布事業が全世界に向かって毎年10月に呼びかける「世界宣教月間」の頂点です。その目的は、まだキリストを知らないたくさんの人に囲まれて生きている、洗礼を受けたすべての人に宣教心を呼び起こし、世界の福音化のために、霊的物的援助をはじめ、宣教者たちの宣教協働を各国の教会間で促進することです。この日、福音化に共通する責任を意識し、普遍性と世界の連隊を祝ったキリスト者からの献金は、各国からローマ教皇庁・福音宣教省に集められ、日本を含む世界中の宣教地に援助金として送られます。

21日（火）西田正神父命日（2021年）
22日（水）中野アカデミー・教区本部・13時30分
24日（金）大水如安神父命日（1994年）
25日（土）連合壮年会主催黙想会・ザビエル教会・14時
26日（日）年間第30主日
▼オリーブの会・教区本部・14時
28日（火）聖シモン　聖ユダ使徒
29日（水）中野アカデミー・教区本部・13時30分
31日（金）キッペス神父命日（2021年）
▼ミタマヤ神父命日（1984年）

【司教日程】 1日中野アカデミー、3～12日聖年の公式巡礼（ローマ）、15～16日長崎教会管区会議（大分）、17日大隅学園、18日愛の聖母園、20日聖マリア学園、22日中野アカデミー、28日愛の聖母園、29日中野アカデミー、30日聖マリア学園及び教区福祉連盟、31日大口明光学園

祈りの意向

【教皇の意向】 さまざまな宗教的伝統間の協力
【日本の教会】 被造物、すべてのいのち、自然環境

教会建設に尽力した恩人

マゾッキ神父とミサをささげる

今年献堂50年を祝った種子島教会

ルチアノ・マゾッキ神父（聖ザベリオ宣教会）様の来日にあたり、彼と共に種子島に来島した6人のイタリア人司祭たちとのミサが8月17日（日）、マゾッキ神父様が建設のために汗を流したここ種子島教会でささげられた。司式はもちろんマゾッキ神父様であった。

確かに今年の3月に中野司教様の司式のもとで献堂50周年をお祝いした。しかし教会建設のためにアルバイトまでして資金集めをした、まさに種子島教会の父であるマゾッキ神父様がこの年に来島されるとは偶然ではなく、神様の計らいであろう。したがってこのミサこそ真の「献堂50周年記念ミサ」なのである。

当時と比較して確かに聖堂の老朽化、また信徒の減少は否めない。しかし教会に集まる過去を知る信徒の目には50年前のマゾッキ神父様の御顔が映ったと思われる。信徒たちにとって聖堂は完成したばかりのあの頃と同じような雰囲気が漂っていたことであろう。おそらく建築までの道程が頭によぎり、完成時の喜びが蘇っていたに違いない。

「時間は戻らない」〝time won't go back〟〝il tempo non tornerà indietro〟…この言葉は今日のミサには当てはまらなかった。

種子島・屋久島教会への献金の報告と御礼

教区の皆様のご好意により、6月1日現在で1,004.737円の寄付が集まりました。

内訳は教会関係から861,487円、施設・記念ミサを含む個人の皆様から143,250円でした。

頂きました献金は、教会の修繕のために大切に使用させて頂きます。ありがとうございました。

種子島教会
主任司祭　鈴木康由
信徒一同

聖心教会へ巡礼

大熊小教区

聖年、各小教区での取り組みはいかがでしょうか。

私たち大熊小教区（大熊・浦上・芦花部、和光園）では、教区指定巡礼教会「名瀬聖心教会」への巡礼を3回計画し、その第1回目を7月27日（日）に実施しました。

前教皇フランシスコの「巡礼の勧め」の呼びかけに沿う形で、名瀬聖心教会へ路線バスあるいは徒歩巡礼が計画されました。

巡礼当日は連日のことでしたが猛暑が危惧されました。でも不思議と空は分厚い雲に覆われ心地よい風が吹いていました。

郡山名誉司教様もともに参加され、指定時間に6人が集合し、和光園教会庭園で「はじめの祈り」を唱え、名瀬聖心教会への徒歩巡礼が開始されました。約40分の道のりを歩き到着すると、先に自家用車を利用した乗り合わせ組の15人ほどが待機していました。

聖堂でロザリオの祈りを唱え、その後、名瀬聖心教会主任司祭の栃尾泰英神父様司式で聖体賛美式が執り行われました。聖年の「希望のお恵み」を参加者で共有でき、晴れやかな気持ちで散会となりました。

聖年は、島外への巡礼も喜びと恵みになりますが、私たちの足もと名瀬聖心教会が世界共通の「希望の巡礼者」のロゴマークを有した巡礼指定教会となっていましたので、改めてそのお恵みに気付かされました。次回の巡礼も心待ちです。

（報告・大熊小教区レポーター）

連合壮年会主催

黙　想　会

日時：10月25日（土）15時
場所：ザビエル教会
指導：小隈憲士神父
内容
15時～　講話
16時40分～分かち合い
17時～　ミサ
18時～　懇親会
※どなたでも参加可能です。

連合壮年会唐湊墓地清掃

10月 19日（日）14時～

※死者の月を前にカトリック墓地の清掃にご協力下さい。

要　理

復活する時の私の姿

皆さんは「復活と言ってもいつの頃の『自分』で復活するのだろうか」と疑問をもったことはありませんか。

人間は神様の被造物であり、神様はいつも見守っていてくださるのですから、その人の本当に一番良い時をご存知なのは神様だけです。ですから「その時」の魂と身体をもって復活するのです。

ここで注意が必要なのは「神様にとって」であり、「自分にとって」ではないということです。

また、「私」以外に復活することはあり得ません。当然のことながら自分が生きてきた中での「自分」で復活するのです。

イエス様はなぜ惨い十字架上での傷をもって復活したのでしょうか。それは手と脇腹の傷とは復活したイエス様が生前のイエス様であることの証だからです。

復活の命が本当にあることを伝えるためには弟子たちに十字架上で死んだ時の姿を見せる以外に方法がなかったのです。

そしてこれがキリスト教の始まりであり、使徒たちを宣教へと駆り立てる原動力となりました。

つまり神様にとってイエス様の最も良い時とは十字架上で人々の罪の贖いとなった時だったのです。

復活は生まれ変わりとは異なります。キリスト教に於いて生まれ変わりはあり得ません。

もし復活の体がその人以外になるとすれば、神様は自らご自分の創造の御業を否定したことになります。だからこそ私たちは復活に希望をおいて信仰をもって他ならぬ自分の人生を毎日過ごすのです。

そのように生きるのであればきっとイエス様が「復活するのにふさわしいとされた人々」と認めてくれることでしょう（ルカ20・35）。

SUY ĐI NGHĨ LẠI TRONG LÒNG

Suy đi nghĩ lại trong lòng, con nhận ra cuộc đời con đầy những biến cố: có những ngày vui vẻ, thành công, hạnh phúc; cũng có những lúc mệt mỏi, vấp ngã, cô đơn. Nhưng ở đâu đó, dù con quên hay con không thấy, tình thương của Chúa vẫn luôn bao phủ và dẫn dắt con. Con nhớ lại những lúc con yếu đuối, ngã quỵ, tưởng như không còn sức gượng dậy. Thế mà rồi, nhờ ơn Chúa, con lại đứng lên, tiếp tục bước đi.

Suy đi nghĩ lại trong lòng, con thấy rõ: không phải sức riêng con, mà chính là Chúa đã âm thầm đỡ nâng. Như Đức Maria xưa đã ghi nhớ mọi sự và suy niệm trong lòng, con cũng muốn giữ lấy từng dấu ấn của ơn Chúa trong cuộc đời. Giữa đất khách quê người, nơi con đang học tập và làm việc, có biết bao lo toan và thử thách. Nhưng chính trong những nhọc nhằn đó, Chúa dạy con biết trưởng thành hơn, sống yêu thương hơn, và đặt niềm tin trọn vẹn vào Chúa hơn.

Lạy Chúa, những ngày đầu tiên đến Nhật, con bỡ ngỡ trước ngôn ngữ, văn hóa, và cả nhịp sống nhanh chóng, kỷ luật. Nhiều khi con thấy mình thật nhỏ bé, lạc lõng. Nhưng chính trong sự yếu đuối đó, Chúa đã giúp con học biết phó thác, học biết kiên nhẫn, và nhất là học biết yêu thương trong âm thầm. Con nhận ra rằng, truyền giáo không chỉ là nói về Chúa bằng lời, mà còn là làm chứng cho tình yêu Chúa bằng cách sống hiền lành, vui tươi, phục vụ và cảm thông với mọi người chung quanh.

Suy đi nghĩ lại trong lòng, đời con chỉ thật sự có ý nghĩa khi được nối kết với Chúa. Ba năm qua, có những khi con nhớ quê hương da diết, nhớ cộng đoàn, nhớ vòng tay gia đình. Nhưng suy đi nghĩ lại trong lòng, con hiểu Chúa đã đặt con nơi đây không phải để tìm sự thoải mái, nhưng để tập yêu thương quảng đại hơn. Qua từng cuộc gặp gỡ, từng mảnh đời, Chúa dạy con thấy được Ngài đang hiện diện nơi chính những con người Nhật hiền hòa, và cả nơi anh chị em di dân, lao động đang vất vả mưu sinh.

Khi truyền giáo tại Nhật, con càng thấm thía rằng: đời nữ tu chỉ có ý nghĩa khi được trao hiến trọn vẹn cho Chúa và tha nhân. Như Đức Maria, con cũng muốn "ghi nhớ và suy niệm mọi sự trong lòng", để mỗi biến cố – dù thành công hay thất bại – đều trở thành bước chân đưa con lại gần Chúa hơn. Xin cho con biết tập sống thinh lặng nội tâm, để nhận ra tiếng Chúa thì thầm trong từng biến cố. Xin cho con biết ghi nhớ và suy niệm tình thương Chúa, để từ đó luôn sống trong tâm tình cảm tạ, khiêm nhường, và trung thành. Ước chi mỗi ngày sống của con cũng trở thành một lời ca ngợi tình yêu Chúa, cho dù đời con còn nhiều thiếu sót và yếu đuối.

Lạy Chúa, con xin dâng những năm tháng đã qua và cả chặng đường phía trước. Xin cho con tiếp tục trung thành trong sứ vụ, sống đơn sơ, âm thầm, nhưng đầy yêu thương, để nơi đất Nhật này, qua đời sống nhỏ bé của con, nhiều tâm hồn cũng có thể nhận ra ánh sáng và tình yêu của Chúa. "Lạy Chúa, suy đi nghĩ lại trong lòng, con chỉ có thể thốt lên: "Tạ ơn Chúa vì tất cả!"

Sr. M. Daria Đỗ Thiên Thanh SPP